

育ち、住まい、生涯を全うする地

平成 18 年 12 月 31 日

原告 原田啓子

1. はじめに

私は原告代表原田学の家内の原田啓子です。48 年間下北沢地区に住み、そのうち 23 年は補助 54 号線予定地に住んでおります。現在、夫と共に起業した株式会社マルコムで経理を担当しております。

下北沢は私にとって、育ったまち、職場、住まい、子育ての場であり、さらには生涯を全うする地であってほしいと願っております。

2. のどかな郊外のまちだった 50～60 年代の下北沢

1958 年、10 歳のとき大阪から北沢 4 丁目（当時 5 丁目）の北沢小学校近隣に引っ越してきました。東北沢の駅舎は上り側にだけあり、下りホームへはいつも踏み切りを渡って歩きました。大阪では、ふたつの出口がある立派な駅を使っていたので、東京は田舎なんだなと感じました。

日曜日には、一家 4 人で下北沢の闇市（現駅前マーケット）で安くて豊富な食材をたっぷり買い込み、一番街の鯛焼きを食べて帰るのが、我が家の定番コースでした。飲食店はまだ僅かだったと記憶しています。

地元の北沢八幡宮の秋祭りでは子供たちが溢れて、なかなか山車の綱に辿り着けないほどでした。子供神輿もありましたが、今と違って女性が担ぐことは許されません。祭りの時の八幡様は、境内から茶沢通りまでずらーっと屋台が並び、夜遅くまで賑わいは大変なものでした。

新宿の伊勢丹と三軒茶屋を結ぶバスが茶沢通りを走っていましたが、しなのや一下北沢の踏み切り間は、対向車が来ると待避場所で待ち、行き過ぎてやおらエンジンをかける状態でした。それでも乗車率は高く、なかなか座れませんでした。

北沢 4 丁目の知人宅の大きな屋敷は、昭和初期に船宿でした。その名残で、周

りを池に囲まれた縁側には釣り船が着いたそうです。広い庭の池に泳いでいた立派な鯉は、大雨の度に屋敷前の溝川（どぶがわ）に逃げて戻ってきませんでした。この池の上手ということから池ノ上の駅名がついたようです。本当に長閑なまちでした。

3. 仕事と暮らしの場としての下北沢

1973年、OLを辞めて結婚。新婚旅行から戻ると、代沢5丁目の新築ワンルームマンションを契約し、会社を始めました。こんなに高い家賃を払って大丈夫かと、不安になったものです。自宅は玉川学園にある奈良北団地でしたが、事務所に泊り込みの毎日となりました。

5年ほどの間に会社の売り上げも伸び、下北沢南口に作業場や事務所を借りて商店街の発展と共に成長していきました。この頃にはライブハウスも登場し、下北沢の新しい顔に目を瞠ったものです。北口には魚屋、肉屋、八百屋、川魚専門店など魅力的な商店がひしめき、いつも混み合いました。車が入らない開放的な空間をそぞろ歩きつつ、店先を覗いたり商品を手を取ったりできる立地が買物客の心を掴んでいたのです（写真資料1）。

1978年、東北沢駅脇のマンションに自宅を移し、事務所も下北沢駅前の商業ビル3階へ移転。社員も15名程に増えました。1983年には北沢1丁目の補助54号線予定地に建つ上場企業の社員寮を買い、事務所兼自宅としました。小田急線を挟んだ南側は緑が多く、憧れの地を手に入れてとても嬉しかったです。エアコンの屋外機の音に苦情があり、急ぎ防音壁を作ったほど閑静な住宅街でした。

4. 子供と祭りの街、下北沢

1984年、渋谷区本町に本社を建てて会社全体を移転。その後は子育ての場としての下北沢と関わるようになりました。

娘は池ノ上小学校や道了尊境内での盆踊りや、一番街の阿波踊り、北沢公園での北沢祭りを楽しみにしていました。子供の数も減ったため、北沢八幡宮の秋祭りでは女の子も神輿をかつげるようになり、法被を借りて大喜びしました。因

みに我が家では、祝い事から厄払いまですべて北沢八幡宮にお願いしております。

(写真資料 2)

5. 東京都・世田谷区への疑問

1990 年以降私達夫婦は自宅前の私道を公道にするための住民運動を通して、都庁や区役所と何度も補助 54 号線計画の具体化に関する質問を重ねて参りました。

「いつになるのかわからない」という行政の言葉を信じて私道を世田谷区へ寄付したばかりです。

「Save the 下北沢」というグループから、補助 54 号線の計画が具体化したというお知らせを頂いたのは 2004 年春のことです。集会に参加して勉強させてもらい、ポスティングのお手伝いや、第二工区の皆様が区役所へ説明を求める要望の取りまとめをしました。しかし第二工区の私達には行政からの説明会やお知らせは一度もないのです。近隣の皆様から頂いた説明会開催の要望をまとめて 2005 年春に区役所の辻氏に掛け合いましたが、「就業時間中に来所してくれたらいつでも説明します」とは仰るものの、「皆仕事をもっており、夜間か土曜日の時間を……」と言えば、「そんなサービスはできない。昼間会って話をするのだから自分の厚意なのだから」と物別れに終わりました。

補助道路とは、幹線と幹線を繋いでこそ意味があるのであって、三分割して、真ん中部分の関係者だけを対象に説明会を開いて済ませるのはおかしいと今でも思っています。

2006 年 12 月 7 日に世田谷区が開催した補助 54 号線及び 10 号線の用地補償説明会で、補助 54 号線第二工区の住民に説明会を求める要望に対して、行政は 2002 年・2003 年にそれぞれ 1000 人程度の人々に説明をしたと回答しました。前述の通り補助 54 号線の行方を殊の外気にしている私は、その 2 回の小田急線説明会も上原中学校で聞いていました。しかしその時は「小田急線の地下化に伴い、補助 54 号線は高架構造から平面構造に替わる」というスライド説明のみでした。質疑応答の際には「54 号線はどのように？」と問いかけもありましたが、「今日

は小田急線の説明会ですから」と却下したり、「まだ具体的ではないので…」と軽く往なしていました。それを数年経った今年に、まるで 54 号線の為の説明会を行った様に発言するのは、行政の詭弁としか言いようがありません。行政側の担当者である辻氏でさえも、説明会開催を要望する私に対して「説明会を 2 回した」とは一言も言いませんでした。

6. おわりに

20 年前は沢山あった緑も代替わりと共に切られて減ってはおりますが、下北沢が静かなまち、落ち着いた住宅街であることには変わりません。補助 54 号線は大きく成長した樹々を薙ぎ倒し、素晴らしい環境を損ないます。この環境をこよなく愛する人々の心やまちを踏みにじらないでほしいです。第二工区内で私の集めた署名（合計 36 件）では補助 54 号線賛成者はわずか 10%でした。行政には地元の意向を無視して、私達の血税を使ってほしくない、と声を大にして叫びます。

以上



1. 70年代初期の下北沢北口の様子
いつも買い物客でごった返していた



2. 北沢八幡の秋祭り
下北沢地域から8つのお神輿が出て、大賑わい